

## 「声なき声」を聞く

**櫻** 坂46のデビューシングル、タイトルは「サイレントマジョリティー」(2016)である。「群れるな！Noの声を上げろ！行動しろ！」という若者への過激なメッセージングでありながら、発売初週で26万枚以上の女性アーティスト売り上げ記録を打ち立てた。その中のフレーズ、「どこかの国の大統領が言っていた、声を上げない者たちは賛成している」とは、明らかにリチャード・ニクソン大統領による1969年のテレビ演説の一節、「偉大なる声なき多数者へ」を指している。彼は、声を上げない「サイレントマジョリティー(静かな多数者)」が、内心はベトナム反戦を叫ぶ「ボークアルマイノリティ(声高な少数者)」に対して批判的なのだと看破したうえで、彼らに政策への支持を訴えたのである。結果としてニクソンは1972年の大統領選挙でも地滑り的な勝利を収めている。彼は、サイレントマジョリティーの票を掘り起こし効果的に集めることのできた稀代の選挙巧者であった。

広義には、そうした選挙も無記名の社会調査の一種である。一定範囲内の有権者全員を母集団とし、その全員を対象とした悉皆調査と考えてよい。有効投票率がそのまま有効回収率となる。しかし、そうした形態的な共通点よりも重要なことは、その結果がともに「質問への回答」と言う意味を持っていることである。選挙も社会調査も、その結果は「訊かれたら答える」つまり「訊かれなければ回答もない」という性格のものであって、訊かれなくても社会に向けて声高に発信されるボークアルマイノリティの主張と

は必ずしも一致しない。世論調査等の結果(投票結果)が、メディアで発信される評論家やジャーナリストたちの見解(投票結果予想)と往々にして異なるのは、それ故である。もちろん、後者が前者に正負の影響を与えることは否定できないものの、西欧型民主主義を基本とする社会にあっては、ボークアルマイノリティではなく、サイレントマジョリティーの意思が社会(政治・政策)を規定する重要な要素であり、社会調査はそれをさまざまな視点からの確に把握するための有効なツールである。

一方、社会には「サイレントマイノリティ」とも言うべき少数者も存在する。犯罪、非行といった逸脱行為に関わる人々、ひきこもり、家庭内暴力等ドメスティックな問題の当事者たち、被差別集団、外国人労働者など、置かれた環境や種々の条件によって社会に対し声を出しづらい人たちである。マジョリティー対象の一般的な社会調査でそのような人々の声を聞くことは難しい。それは、「訊くことが難しく回答を得にくい」あるいは「訊かれても答えてもらえない」ために、「訊かれたら答える」という前提条件が成立し難いからである。

しかし、社会は、当然そうした少数者も含めて成立し、動いている。現実の社会を理解するためには、彼ら／彼女らの状態・行動・態度・意思を、ジャーナリストティックにではなく学術的に把握することが不可欠である。その意味で、サイレントマイノリティの理解は、今日の社会調査に与えられた重要な課題である。

岩永雅也

社会調査協会 専務理事